
龍狩り七英雄伝説

凡 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍狩り七英雄伝説

【Nコード】

N1860Z

【作者名】

凡 飛鳥

【あらすじ】

龍狩り この世界には存在しなかったはずの龍、通称

ドラゴンを狩る力を手に入れた英雄達の総称である。

それぞれは七色の龍に選ばれたこの世界の住民であった、七英雄はそれぞれ違う思いを持っていたが、それぞれの思いはやがて一つの思いとなり、確かに希望の光となった

この作品はユーザー登録をしていない方でもコメントをして頂けます、どなたでもコメントしてください。

第零話 プロローグ

「エル！右からだ！」

黒髪の青年は緑の髪の少女に指示を出す。

「はい！」

「 っ」

緑の髪の少女は龍の右側から魔法を呼び出し攻撃する。

「らああああっ」

銀髪の青年は正面から龍に立ち向かい、頭から斬り付けた、そして龍は力なく倒れ、屍となった。

「ふいー今日も疲れたなー」

銀髪の青年は倒れて本当に疲れたように水を飲む。

「正面から出るだけでどう疲れるんだ、それに作戦どうりじゃないだろ」

黒髪の青年は銀髪の青年を叱る、しかし銀髪の青年はケロリとした顔で。

「騎士は正面から立ち向かっていくんだよ、力任せの狂戦士バーサーカーと同じにしないでくれよな」

その言葉に黒髪の青年は怒ろうとするが呆れたようにため息をつき、龍の方へ歩いて行った。

「まだ七英雄は揃ってはいない、先にすべきことは龍を倒して力を吸収し、残りの四人の英雄と合流することだ、だから戦闘は早く終わらせるべきなんだ」

黒髪の少年が龍の亡骸に手を添えると、龍の体が鈍く光り、そこから緑の丸い結晶が現れた。

「エル、今日はお前の取り分だ」

黒髪の少年は緑の髪の少女に緑の丸い結晶を投げ渡すと腰に付けてある黒いミニバッグから赤い水の入った瓶を取り出し、中身を飲み

干す。

「エル、吸収できたか？」

「できました、少し違和感がありますが、大丈夫です」

「エルちゃんはレトと違って素直でいいな」

「素直じゃなくて悪かったな、今日お前晩飯抜きな」

「ぎゃああああ、ごめんごめんほんとごめんなさい玲人^{レイト}さん許してください、晩飯抜きはほんと勘弁してください」

銀髪の青年は黒髪の青年の足元に腕を回し泣きながら謝っている。

「わかった！わかったから！涙を鎧に着けるのはやめろ！錆びる！」
すると銀髪の少年はすぐに泣き止み。

「やったーひゃっほーい、やっぴー」

「はぁ、現金な奴だ」

「まあレイトさんが晩飯作ってあげないなら私が作ってあげるんですけどね」

その一言で、二人の顔が一瞬で蒼くなった、そう、この美少女、優しく賢いような顔つきをしているため彼女は料理もうまいと思う方もいるのだが、この二人は知っている、彼女の料理が龍狩りを失神させるほどの料理だということを。

「すまないやめておく」

「ごめんむり」

「なんでですか？」

「あれほどのゲロクソ料理でまずいと気づかないってエル味覚大丈夫かッ!？」

黒髪の少年は緑の髪の少女に大丈夫か!？というがそれが彼女には悪く聞こえたようで。

「レディーに対してそんなこと言っではなりませんよーっ!」

「ギヤアアアッ」

龍狩りの物語が、今始まる。

魔法世界と二つ名

ヤガミ レイト
八神玲人それが俺の名前、科学の力が発達していたこの世界で、五年前、謎の生物が大量に現れた。そして一部の者には、以前存在しなかったもの、魔力が現れた。

魔力適合者、通称魔導師は魔法でしか出来ない事を仕事としたり、持たぬ者達への救助などに利用したりなどした、しかしそれはあくまでも三年前までの話、魔力を持たない者へは差別や今までの世界では禁止されていた、奴隷などを無理やり魔法で隷属化させるなど、魔力を持つ者のみの特権などが作られた、俺は、魔力を持つ人間だ、だけど隷属させたり差別をしたりなどする気もない、世界の中でも珍しい水平魔導師の一人だ。
インディスリミネットマジシャン

しかし水平魔導師は日本で500人、世界で100000程度だ、
インディスリミネットマジシャン
そして水平魔導師のみの人間差別を無くす為の同盟が水平魔導師同盟だ、水平魔導師の力により、この世界に人間差別はなくなった。

そんな話は置いておいて、今俺がいる学校、日本国立魔導師育成学園だ、この世界で一番優秀な魔導師が多くいるのは日本だ、そのため海外からも編入生や留学生が多く来る、おもにこの学園で魔法を持つ者の属性は炎か風が多い、しかし例外も無い訳でもない俺自身も、俺と一緒にモンスター討伐で一緒に名を挙げた親友も、珍しいなんて言葉では表せないほど希少な属性だ、一部の魔導師は二つ名がつく。

俺は学生だが沢山の成果を挙げたため、結構有名な二つ名として『
ステイグマ
凶星』や『常闇の狂戦士』、そして『
チェインドールズ
虚数地獄』等の二つ名が存在する。

どうも恐ろしい二つ名だが、周りからはなぜかモテる、話を聞くと、

「かつこいい」や「二つ名は怖いけど本当は優しいギャップがいい」などの理由があるらしい、さらには親友のハクからは参謀と呼ばれたりなど散々だ、ハクというのは親友の白王ハクオウ 仁だ、こいつの二つ名は『炎色公主』スパイラルフレイム や『封印物語』インスタントカルマ そして『希望光の守護戦士』など俺とは違い思いつきり護つてくれる感じの二つ名だ、そのため俺よりもてる、べつに女性は好きじゃないが二つ名の違いに少し理不尽さを感じた。

「おーい怜人！優等生のお前がボーっとして、何かあったのか？」
確かこいつはうちのクラスの担任で魔法付加系の教師だった気がする、メガネをかけていて髪が後退し始めている。

「そういえばまだ授業中でしたね、すいません、終わるまでは精々その簡単なことをほかの生徒たちに披露してあげてください」

とりあえず皮肉を込めて言ってみる、しかしこの世界でかなり希少な属性の『闇』を持つ俺と戦えば付加魔法使いエンチャンターなどのような支援型が勝てるわけがない、そのため担任は何も言えずに黒板に魔方陣を書く、そうしてこいつた。

「これが攻撃付加の魔方陣だ、だれかやってみろ」

誰も手を挙げない、それもそうだ。付加系魔法など自身の強化魔法で普通に応用できるし起動が難しい、さらにこの教師は失敗すると全ての教科点数を下げるようにするのだ、だれも手を挙げないわけだ、そのため俺が挙手する。教師には怜人、と言われたので立ち上がりこいつた。

「わかったよ、またここの奴等は人に頼る、ここで俺がお前らに特別講習だ、付加魔法系は魔方陣が複雑で覚えるのが難しい、だから大抵付加魔法を使う際は何かを書いて魔力を流し発動し消耗品として扱う、だが逆に言えば、すべて覚えればいつでも付加することができる、こんな感じにな」

俺が付加対象としたのは教師の頭、詳しく言えば後退したところや

しかけたところだ。
俺がそのとき思ったことは。

「やりすぎた……」

教師の髪の毛が、滝のように教室の床へと垂れ下がった。

五体の謎の飛行モンスター（前書き）

二人の視点を入れてみました、うまく切り替えができているかわかりませんが、これからがんばってみようと思います。

五体の謎の飛行モンスター

「やりすぎた……」

その次の瞬間

「警報 警報 この学園に五体の謎の飛行モンスターが現れました、生徒たちはすぐに退避してください、なお、教師たちはのちに来る水平魔道師、そして冒険者と共に共闘し、直ちに撃退、または討伐を行ってください」

冒険者 それは魔力を持ち、冒険をしたりギルドと言う国家機関に所属する者たちの総称である、傭兵達とは似ているようで似ていない者達だ。

そして水平魔道師、まさか俺の仲間がここに来るとは思ひもしなかった。

生徒だからってここで諦めるわけにはいかないな

隣から声が聞こえた、

「ああ、そうだな、それじゃあ」

「行くかつ……」

窓ガラスを破り、二人の少年が飛び出る、しかしその隣のクラスからは緑の髪をした少女が飛び出ていた、その者は杖を持ちながら飛び出て、玲人の顔を見ると確かに顔を朱に染めていた、玲人はその者の名前を思い出す、確か隣のクラスの優等生美少女で日本人とド

イツ人のハーフだけど日本人顔の…風鈴 エルだったっけ？

警報が流れ、生徒たちが我先にと教室を出ていく、私は自らの杖を握りしめて、自らの周りに風のバリアを構築する、そして気が付いたら窓ガラスを割って飛び出ていた、自分でも驚いていたが、それより驚いたのは、少し遠いが右隣に二つの人影があつたのだ、自分と同じく謎のモンスターと戦おうとする者が居る事に、私は驚いた、

しかし驚きはこのままでは終わらなかった、一番近い方の人影が、いわゆる気になる人と世間では言う…

八神 玲人だったのだから…

五体の謎の飛行モンスター（後書き）

どうでしたか？ やっぱりこんな駄作を読んで頂ける方はいないでしょうが、暇な時でもみて下さると光栄です、それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1860z/>

龍狩り七英雄伝説

2012年1月5日20時53分発行